

—《書評》—

劉玲芳著 大阪大学出版会

『近代日本と中国の装いの交流史
——身装文化の相互認識から相互摂取まで』

(神奈川大学) 孫 安石

評者は、2003年から所属する大学の共同研究の一つとして非文字資料研究センターに参加しているが、その研究の柱の一つに、日本と東アジアの日常生活に関する事物に固有の名称を与え、英語、日本語、中国、韓国語の説明を加えた事典として「絵引」を作成する、という研究活動を横目で見てきた。この共同研究の成果は、いまは『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』(2008年)、『日本近世・生活絵引』(2008年)、『東アジア生活絵引』(2008年)、『日本近世生活絵引 南九州編』(2018年)、『日本近世生活絵引 琉球人行列と江戸編』(2020年)として公開されているが、「衣・食・住」という日常生活を取り上げた研究の難しさを隣で実感することができた。(神奈川大学の非文字資料研究センターのHPを参照。http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/publication/research_result_report.html)

これは同僚の研究者の苦勞をみたという話してあるが、評者の研究テーマには、上海を中心とする租界と日本の交流という領域があり、また、清末から戦前の中国人留学生と日本の交流を中心とした日中関係の研究に関わっていることもあり、東アジア交流史の中で服装を媒介とした近代日本と中国の交流史の解明をテーマとする本書は、ぜひ読んで見たいと思っていたところ書評の依頼を受けることになった。これは願っていない機会でも、ぜひ勉強する機会として活用しないわけには行かない。書評を引き受けた経緯である。以下、まず、各章の内容を紹介するところから始めたい。

第一部 身装文化の相互認識

第一章 中国人が「東遊日記」に描いた日本

人の身装文化

第二章 1900—1910年代における日本の対中貿易にみる中国人の身装文化

第三章 1910—1920年代における日本人の中国人に対する身装観

第二部 身装文化の相互摂取 (一)

第四章 日本人男性と「支那服」

第五章 日本における中国人男子留学生の身装の変遷

第六章 日本の「学生服」から中国の「中山装」へ

第三部 身装文化の相互摂取 (二)

第七章 中国人女学生の身装にみる日本の影響

第八章 清末民初の中国における「東洋髻」の起源と流行

第九章 日本における「支那服」の流行

終章
参考文献 付記

本書の「第一章」では、清末の1870年から1890年代に日本に滞在した中国人の東遊日記を取り上げ、かれらが観察した日本の風俗(齒黒、眉剃り、下着)についての記述を紹介し、同時代の中国人が抱く日本観、文明観が自国中心主義、あるいは中華思想を背景にしたものであったことを指摘している。

「第二章」では、1900～1910年代における日本の対中国貿易に関連する資料として、内田清『無尽蔵の支那貿易』を取り上げ、綿糸綿布の輸出額の増加が中国人の身装文化の豊かさをもたらした点が紹介されている。

「第三章」では、1910年代以降に入り、日本の中国に対する関心が高まる中、谷崎潤一郎や芥川龍之介の文学作品と『読売新聞』や女性関連の雑誌などに現れる日本人の「支那服」に対する言及を紹介し、中国に対する認識の変化の解明を目指す

している。

とくに、著者は当時の日本社会がみせた中国男性の辮髪と女性の纏足に対しての強い興味と1920年代の「支那服」の優れた機能性と実用性を重視した支那服優位論などの考え方の深層には「近代」を成し遂げた文明国日本というイメージが横たわっていたことを指摘している箇所は興味深い。

「第四章」では、日本人男性と「支那服」との関係性を1910年代の歌舞伎俳優の市村羽左衛門と市川左団次から書き起こし、芥川龍之介、井上紅梅、後藤朝太郎などに代表される文学者や支那通の作品を丁寧に読んで行けば、中国の風俗と支那服に対する様々な観点を観察できることが紹介されている。また、中国文学研究者として有名な吉川幸次郎や倉石武四郎なども中国留学から帰国した後、支那服を愛用した事例を取り上げ、かれらの中国研究への執着や「反骨」精神の現れが読み取れるとする。

「第五章」は、日本に留学生した中国人男子学生によって発見、導入された学生服について分析している。19世紀の末、清国人という身分で日本に留学した中国の若者が清国の「長包」と「辮髪」という伝統的な身装をあきらめ、洋服に着替え、辮髪を切り落とし断髪するには、様々な葛藤と心の抵抗があったことが、当時の留学生が書き残した雑誌の記事や日記などから確認できる、とする。しかし、20世紀に入り、中国人留学生の日本での生活を案内する各種の書籍（『日本遊学指南』、『日本留学指掌』など）では徐々に洋服として学生服を取り入れる動きが進み、辛亥革命以降になると断髪と洋服化への傾度はいよいよ強まり、1930年代に入ると『日華学報』などの口絵として掲載された写真などで学生服が多くの中国人学生に受け入れられていた、と指摘する。

「第六章」は、孫文など近代中国を代表する男性の服装として有名な「中山装」がじつは日本の

学生服に由来するものではなかったか、という仮説を解き明かす。孫文が愛用した服装としてその名前がついた「中山装」の由来については諸説あるが、著者は、清末に日本から導入された学生服に注目する。

著者は最初、清末の体操教科書に登場する挿絵から話を説き起こし、新学校制度が導入される1905年を前後した時期の写真資料などを提示し、辛亥革命以降の中国の男子学生の服装は日本の学生服を見本にしたもので、1920年代の『申報』などの新聞には、学生服の着用を勧める記事が登場し1920年代から30年代に中国で定着する。その後、「中山装」は、1910年代の日本の学生服が何回かの変形し、1925年前後の「中山装」と学生服が混合する時期をへて、1929年には中華民国の公務員の服装として規定されるに至ったのではないかと、という結論を導き出している。

「第七章」は、清末民初の時期に日本に留学した中国人女子によって日本の女学校の女袴が導入され、また、髪型も質素な「束髪」が推奨されたことを『朝日新聞』の記事や実践女学校に残された写真資料などを通して、検討する。

そして、1920年代の中国人女子学生の間で普及した「文明新装」の由来について次のように考察する。清末の時期に日本の女子教育を導入した女子学校「務本女塾」、「愛国女子学校」、「上海女子蚕業学校」などは、服装において「質素」を旨にする日本の女子教育の考え方に影響を受け、このような考え方は1912年以降、中華民国の教育部にも踏襲され、1920年代から「文明新装」として定着することになったと説明する。

「第八章」では、清末民初の中国女性の髪型として流行った「東洋髻」の起源と流行について、従来の『点石齋画報』に基づき東洋（日本）妓女に由来するという説に疑問を提示し、1910年代の中国で流行った「東洋髻」は、日本との女子教育交流の過程のなかで、流入が始まり、1910年代に

入り日本で勉強した女子留学生の帰国と共に、中国でも流行することになった、という。この「東洋髻」という髪型の流行は、『申報』や『婦女雑誌』など各種の画報や広告に登場する女性の美人図の中でも確認できるとする。

「第九章」は、戦前の『読売新聞』と『朝日新聞』を取り上げ、日本における「支那服」の流行を数量的に分析し、1910年代から1920年代中頃までの期間を支那服の認識期間として、1920年代から1926年までの期間を支那服の流行の準備期とし、1926年から1928年の間、支那服は、流行の最盛期を迎えることになった、と指摘する。

以上、本書の内容を簡単に紹介したが、まず、内容に関連する指摘を幾つか提示してみたい。著者が「序章」で述べているように、本書の特色は、近代東アジアにおいて日本と中国の相互の「身装」の交流という視点をもって比較、解明することを試みるところにキラリと光る着眼点にある。

この相互の交流を分析する際取り上げる資料は多岐に亘り、「東遊日記」、貿易関連の資料、歴史資料、新聞雑誌、視覚資料、総合雑誌、教育関係の資料、中国人留学生の日記、文学作品、女性雑誌などを取り上げている。しかし、果たしてそれぞれの資料が十分に吟味されているのかについて若干、疑問が残らないわけではない（6頁）。

例えば、第一章は「東遊日記」を使った分析であるが、「東遊日記」については東京都立図書館の「実藤文庫」の目録が公開されており、清末の部分については、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』において付録として、「清末中国対日視察者一覧」がまとめているので、その他の「東遊日記」をより徹底的に使うことが可能であったように思われる。

また、第二章は、内田清『無尽蔵の支那貿易』を取り上げた検討であるが、中国に関する各種の貿易関連の史・資料は当然、数えられないほど多く、その結論が十分、吟味されているとは言えな

い。また、内田清『無尽蔵の支那貿易』が全体の三分の二のページ数を咲いて中国の身装文化を紹介している（41頁）、とするが、そうであれば、その目次を挙げた方が、説得力があったのではないか。以下に、第二編服装の目次の一部を挙げてみるが、その他にも同書が含む内容は、住居、室内用意品、洗面所、化粧用具、漆器、食事など正に衣食住と中国の風俗に関する紹介であったことに触れるべきではなかろうか。また、同書の著者である内田氏が明記しているように同書に関連する中国についての記述は、彼一人の調査または観察にも基づいたものではなく、中国人の姜梅生、江平波、徐眷臣の3名の実地調査と協力があったという事実も重要であろう。

内田清『無尽蔵の支那貿易』の「第二編 服装」の目次（一部）

第一編 容姿（略）

第二編 服装

第一章 総論

第一節 支那人服装の研究方法

第二節 支那服の種類

第三節 支那服の形状

第四節 衣料及寸法

第五節 支那服の利害

第二章 支那服の衣料

第一節 綿布類

第二節 麻布毛布及び毛皮類

第三節 絹織物

第三章 衣料の色彩及模様

第一節 創設

第二節 色彩の研究

第三節 模様の研究

第四節 支那に於ける色彩の名称

第五節 色彩及模様に対する支那人の嗜好

第六節 衣料の種類と図案

第七節 支那の風土と色彩の関係

第四章 特種の服装

第一節 女子老人小児の服装

第二節 礼服 喪服 婚服

第三節 各種の服装並に衣服付属品

第五章 支那輸入貿易と衣料並に其原料 (以下、略)

第三編 住居 (略)

第四編 器具 (略)

第五編 食物 (略)

第三章と第四章は、日本の知識人の間で支那服がどのように受容されていたのかを、文学者の谷崎潤一郎と芥川龍之介、支那通の後藤朝太郎と井上紅梅、中国留学組の吉川幸次郎、倉石武四郎などを取り上げて検討しているが、そこからさらにその他の日本人に広がったという「様々な日本人」の部分(107頁)の検討こそが必要ではなかったか。

第五章と第六章では、中国人の男子留学生によってもたらされた日本の学生服の受容が取り上げられているが、当時の留学生の生活を知り得る資料として『日本遊学指南』、『日本留学指掌』が使われている。しかしこれらも一部の内容が使われるのみで、例えば、中国人留学生の生活案内に関連する書籍などを時系列に並べるなどのより本格的な利用が可能ではなかったか。さらに、写真資料として『留学早稲田大学己酉卒業性記念写真帖』(130頁)、『日華学報』(139頁)を使っているが、その他の年度の卒業写真はなかったのか、また、その他の大学の卒業記念写真を使うことも可能ではなかったか。さらに欲を言えば、『日華学報』の他に中国人の医学関係留学生の交流を記録した『同仁』雑誌などの利用が可能であったのではないか。

第六章の日本からの学生服の伝来を論じる時に参考資料として体操教科書を取り上げているが、その他の修身教科書や家事教科書などに含まれた図案なども検討の対象として取り入れるべきでは

なかったか。また、孫文の中山装を検討する際に、「中華民国時代のファッションを研究するには、現在の中国では最も資料的価値の高い雑誌とされている」(178頁)という触れ込みで紹介されている『良友』画報であるが、その割には同書ではその他に中国人女性の服装を論じる時にもほとんど使われていないのではないか。

本書の全体にかかる最も重要な点については以下のことを指摘できる。例えば、日・中の身装文化に最も影響を与えたのは、実は欧・米からの身装文化ではなかったのかとの疑問が残る。その相互の比較を前提としなければ、日・中の比較を論じることとはできない。また、1930年代以降になるとハリウッドの映画が登場し、人々の日常と娯楽生活に大きな影響を与えることになるが、その分析が足りないのではないか。

しかし、これらの指摘により本書の持つ着眼点の面白さまでもが否定されるわけではない。著者の意図する近代日中の服装文化の交流に関する本格的な研究が、同書によって始まったことはひとまず高く評価できるだろう。

最後に同書の体裁と形式について感じたことを二点触れておきたい。一つは図版の出典が本文中に明記されておらず、出典を確認するためには注釈の番号を一つ一つ確認する必要があることである。さらに、注釈の番号が各章ごとに別れていないので、注の通し番号が500以上になっている。読者の立場からはできるだけ分かりやすい体裁をとってほしい、と思った。あるいはこれは著者ではなく、同書の編集者が気づくべき問題であったかも知れない。

(2020年10月, 340ページ, 5,400円+税)